

日本史A課題プリント 3

東アジアとの交流 近世

教科書 p.18-19

[中継貿易と海禁政策]

16世紀の東アジアでは、(①) を要とする中継貿易がさかんであった。16世紀半ば、倭寇の船が(②) に漂着、鉄砲を日本に伝え、さらに(③) が鹿児島に上陸して、キリスト教を伝えた。

織田信長の死後、天下を統一した(④) は、キリスト教への警戒を強め、宣教師追放令を出したが、(⑤) を奨励していたため、その対策は不徹底であった。

江戸幕府をひらいた徳川家康は、東南アジアとの(⑥) を奨励した。しかし幕府は、キリスト教徒が急増すると禁教令をだし、オランダ商館を平戸から長崎の(⑦) に移しオランダ・中国との貿易を長崎に限定して幕府が利益を独占する海禁政策をおこなった。いっぽう幕府は、朝鮮との国交を、対馬の宗氏を通じて回復し(⑧) を迎えた。薩摩藩の支配下におかれた琉球王国は、明に朝貢を続けるいっぽう、国王の代替わりに(⑨) を、将軍の代替わりに(⑩) を江戸に送った。また幕府は、蝦夷地の支配を松前氏にゆだね、(⑪) との交易を独占させた。

[4つの口と東アジア情勢の変化]

近世の日本では、対外関係の場として(⑫) ・ ・ ・ (⑬) の4つの口がおかれた。このうち、オランダ・中国は国交のない「(⑬)」、朝鮮・琉球は「(⑭)」、蝦夷地は「(⑭)」と位置づけられた。幕府は、貿易と海外情報を独占的に管理するしくみをととのえ、オランダ商館長が毎年提出する(⑮) や、中国船が提出する唐船風説書により、世界情勢の把握につとめた。

この間、朝鮮通信使に同行してきた儒学者・医師・絵師や中国からの商人、僧侶、医師、絵師などが、その学識・技術を教授した。また西洋の学術・文化を中国語に翻訳した漢訳洋書の多くが輸入された。いっぽう、中国には、銀・銅、17世紀末以降は、昆布や(⑯) とよばれる海産物が大量に運ばれた。

このような東アジア諸国の関係は、18世紀後半から次第に変化していくことになった。

日本史A課題プリント 3

1 異国船の接近と幕藩体制の動揺－幕府は、なぜ政治改革にせまられたのか－

教科書 p.24-25

[江戸時代の社会のゆらぎ]

全国統一を果たした(①)にはじまる江戸幕府の支配体制を(②)とよぶ。幕府は大名統制、朝廷統制、農民統制などによって江戸時代約260年の支配の基礎をきずいた。対外政策では「鎖国」をしき、キリスト教禁止と幕府の貿易統制・独占をはかった。しかし、18世紀末には対外政策の見直しをせまられ、村や町も商品生産の発達によって大きく姿をかえていった。

[異国船の接近]

ロシアは1792年に(③)を根室に派遣して通商を求め、1804年には(④)を長崎に派遣してきた。しかし、「鎖国」を理由に幕府はこれを拒否した。また、1808年にイギリス軍艦(⑤)号が交戦中のオランダ船を追って長崎に入港する事件がおこった。ロシアの進出に対して、幕府は(⑥)・最上徳内・(⑦)らを千島・樺太の調査に派遣し、松前藩から蝦夷地を取り上げ、直轄領とした。異国船の接近に危機感を抱いた幕府は、1825年に(⑧)を出して対応した。

[幕府の改革]

18世紀後半になると、商品生産の発達によって本百姓のなかには地主となる者や豪農となるものが生まれ、農村の(⑨)がすすんだ。土地を失った農民が小作人や日雇い、都市の下層民となった。また天災によって百姓一揆や打ちこわしなどが増加し、江戸の社会は不安定な状態であった。そのようななか、天明の飢饉の後、老中松平定信が農村の立て直しと都市住民の生活の安定をめざして(⑩)をおこなった。しかし、(⑪)をきっかけに大規模な打ちこわしや百姓一揆が激増した。幕府は江戸に米を集中させ打ちこわしの発生を防いだが、その影響で大坂では米価が高騰し、都市の民衆の生活を直撃した。そのため1837年には(⑫)による武力反乱がおこった。1841年には老中首座の(⑬)によって天保の改革が実施された。(⑭)を解散させ、物価の引き下げをはかり、農村の再建をはかるために人返し令を出した。しかし、1843年、江戸・大坂周辺を幕府直轄とする(⑮)が諸大名らの反発を招き、改革は失敗に終わった。